

平成 30 年度

事業所名 : グループホームぬくもりの家

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0372500496		
法人名	社会福祉法人 胆沢やまゆり会		
事業所名	グループホームぬくもりの家		
所在地	岩手県奥州市胆沢南都田字大持30番地		
自己評価作成日	平成30年7月25日	評価結果市町村受理日	平成30年11月9日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kai-gokensaku.mhl.w.go.jp/03/1/ndex.php?act=on_kouhyou_detail_2017_022_kani=true&ji_gyosyoCd=0372500496-00&PrEfCd=03&VerSiOnCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわての保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通二丁目4番16号
訪問調査日	平成30年8月31日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

当施設では、胆沢高齢者総合福祉施設ぬくもりの家の併設施設として開設17年目を迎え、法人の理念「優しく、温かく、共に生きる」の基、ぬくもりの家「利用者の幸せ、地域の幸せ、私たちの幸せ」の実現に向けて取り組み、地元幼稚園、小学校、個人、団体他により、地域交流スペースにおいては展示発表や各種イベントの場の触れ合いなどの交流の場となっています。また、保健・医療・福祉の各サービス事業所と連携を密にし、「安全・安心の基本的ケア」に取り組んでいます。今年の事業計画は、利用者一人ひとりの思いに「寄り添い」「自律した生活」を送れるように支援しています。日帰り温泉旅行や外出、買い物、オープンガーデン等、地域に出向き人々との繋がりを持つように努めています。

行政、医療、福祉の関係機関や施設が集合する「達者の里」エリアに、法人が一体的に運営するユニットケア型特養、ショートステイ、通所介護・訪問介護・居宅介護支援の各事業所と併設されている。法人の基本理念のもと、ホームの今年の目標は「ひとり一人の思いに、寄り添いと生活の自立」である。関係機関が棟続きで連携しやすいことや住民が足を運ぶ機会が多くある強みを生かし、交流スペースでは各事業所の利用者や来訪者との交流、月1回のふれあいサロンも開かれている。職員は運営推進委員、家族や地域住民の協力の下で、避難訓練やオープンガーデンの見学、温泉旅行など利用者の安全・安心確保と住民との付き合いの和や機会が多く持てるよう日々支援に努めている。里孫として訪問する近隣小学生との日常的な触れ合いは10数年の歴史を持ち、利用者の元気と笑顔に繋がるホームの自慢でもある。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

【評価機関:特定非営利活動法人 いわての保健福祉支援研究会】

平成 30 年度

事業所名 : グループホームぬくもりの家

2 自己評価および外部評価結果

自己 外部	項目	自己評価	外部評価		
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「法人基本理念・方針」「ぬくもりの家基本方針・基本方針」「ぬくもりの家キーワード」「安全運転八則」「GH介護理念」を毎月1回全職員で会議の前に唱和して意識の統一や向上を図っている。	職員会議では会議に先立ち法人、ぬくもりの家の理念や基本方針を唱和し確認している。特にホームの介護理念は毎朝申送り時に再確認しながら支援の拠り所としている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域社会との交流では里孫、小・中・高生、ボランティア等の訪問を積極的に受け入れている。また、小学校の運動会へ参加するなど、年1回、地元の夢の湯温泉への日帰り旅行をして地元の人と触れ合っている。	今年は36名の小学生の里孫を始め園児達との交流も活発に行い、祭りの手伝いには高校生にも協力を求めている、傾聴ボランティアやデイサービス利用者との交流、地域のガーデニング見学と住民とのふれあいの場は多く、職員は清掃活動にも参加し地域とは普段づきあいが行われている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域貢献事業として、地元小学校へ雑巾の寄贈を行う。また、運営推進会議で認知症について資料を配布し理解を深めている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	当事業所に関する生活状況の報告、外部評価、事業計画・報告を行い、助言や意見を頂きながら、サービスが向上出来るように運営に活かしている。また、事例検討を通して対応方法について助言を頂いている。	市の介護保険担当課長、地域・家族の代表者5名を委員とし、ホームの状況を見学、報告しながら活発な話し合いがなされている、入居を知られることを拒否する家族への対応、菜園管理、地域内の情報提供、避難訓練の参加協力と委員の意見・助言、協力を得て、サービスの向上に活かされている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	利用者について問題や課題が生じた時、解決に向けて、随時関係担当者や奥州市地域包括支援センターと連携を図っている。2名の利用者が徘徊SOSネットワーク登録しており、連携を強化している。	地域包括支援センター、支所健康福祉課とは棟続きであり、事務連携や困難課題がでた都度、出向いて解決に繋げている。医療、行政、事業所が同一エリアにあることは、ホームと関係機関との連携を図る上で強みとなっている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	指針やスピーチロックなど、職員会議で資料を配り、身体拘束をしないケアの必要性や職員の意識向上に向けて取り組んでいる。	日常のスピーチロックに特に気を付けており「職員禁句集」を作り研修を重ねている。帰宅願望や転倒不安のある利用者一人一人に気配りし寄り添い、散歩やセンサーマットの活用で拘束をしない支援に努めている。	

[評価機関 : 特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会]

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内の虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	身体拘束廃止対策検討委員会を設置しており、三か月に一回開催している。新人職員に拘束や虐待に対する体験研修を実施しており、また、職員禁句集を毎月読んで意識向上に努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	職員会議で日常生活自立支援制度や成年後見人制度について学び、利用者個々に検討している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約や加算等の変更等があった場合、または、介護報酬改定に伴う加算の必要性、料金改定の理由等について、家族に分かりやすく説明して、質問に対して丁寧に説明して同意を得ている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	第三者委員の掲示と管理者・受付け・職員のポスターを貼り家族へ周知している。また、担当者会議がある際は家族の意向や要望を確認しており、面会時も気軽に職員に意見を話せるように声がけ等をしている。	利用者の日常の様子を毎月報告しながら家族が行事や面会で来訪した際に希望や意見を聴いており、利用者の日々の暮らし方の希望が多い。運営推進会議の席も利用者・家族の意見、要望を聴く機会としている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月の職員会議で出された意見や要望・提案は、会議録を通じて上司に報告して改善に向けて取り組んでいる。また、管理者が職員会議に参加して直接意見や助言を頂くようにしている。	法人内会議は各事業所課長以上であったが主任会議を新設したことにより、現場のより具体的声が吸い上げられ手当の見直し等の処遇改善が行われている。市が設置した施設を法人が受託しており、恵まれた職場環境となっている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人事考課制度を導入し、公正、公平な評価が実施されている。また、個人目標シートを作成して、やる気を引き出して向上心を図っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人研修、職員研修、出張復命会を計画的に実施している。基本的な介護技術の習得を得るため、マニュアルの定期的な見直しやロールプレイを実施し、スキルアップを図っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	奥州ブロックのグループホーム定例会に参加して勉強会・交流を行っている。また、グループホーム協会の職員交換研修を行い、サービスの質の向上に努めている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	家庭的な雰囲気の中で、心地よく過ごせるように、受容の態度と不穏や興奮状態の時は、寄り添って話を聞いて安心できる雰囲気作りを気配りしている。また、職員間で申し送りを通して情報の共有している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	契約や面会、担当者会議の際、本人の状態や家族の意向・要望又は、困っていることをじっくり聴いて受け止めている。入所申し込みの際は、施設内を見学して、グループホームの生活を詳しく説明している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	奥州市地域包括支援センターと情報交換を共有していて、徘徊ネットワークに登録する際、家族に詳しく説明して同意を得てから登録申請を行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	「介護理念」を実践している。畑の野菜作り、花の世話、掃除、調理、雑巾縫い、プランターにミニトマトを植えて利用者一人一人が役割をもって、生きがいのある生活を支援できるように努力している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	毎月、お便りを作成し、利用者の写真を添えて、日常生活の様子を報告している。行事などには参加を促し、家族との関係を大切にし、共に支えあう関係作りをしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	家族や親戚の面会時には、地域交流スペースや談話コーナーを利用して頂き、ゆったり触れ合えるようにしている。また、里帰りを計画して自宅へ行く機会を持ち、つながりを大事にしている。	馴染みの店に家族と買い物や外食に出かけたりデイサービス利用の友人と面会できるように連絡、気配りしている。お盆には4名の利用者の墓参に職員も同行した。里孫との新たな馴染みも利用者の楽しみとしている。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	食堂のテーブルの席や利用者同士の親しい関係作りが出来るように職員間で話し合っている。利用者の生活習慣や思いを大事にして職員間で情報を共有し、孤立せず共に支え合える雰囲気作りに配慮している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	利用者や家族等に対して、契約が終了したその後の相談や支援に応じている。また、利用者の思い出の写真を家族に届けて継続的に関係性を大事にしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者一人ひとりの個性を尊重し、趣味や生活リズムを把握し、利用者の意向や思いを大切にしている。本人に確認できない場合は、面会時又は電話で連絡した際、ご家族に確認して関わりを多く持っている。	職員は日々の会話や行動からの気づき、ソファでひとり寛いでいるときのつぶやきを大切に、業務日誌や送りノートに記録したうえで、家族に伺いながら利用者の思いや希望を推し図っている。母親の思い出話がよく出されることから、回想法も試みたいとしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所前の面接や契約時に家族や本人聴取している。また、日常生活の中で利用者とコミュニケーションを図りながら知り得た情報など家族に確認したり、記録に残して職員間で情報を共有して、より良いケアを目指している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	業務日誌への記録の他、送りノートを活用して情報の共用を図り、一人ひとりの生活様子を把握できるように努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎月、支援経過を担当職員が入力しており、アセスメントやモニタリングを充実させながら、24時間シートを活用している。また、課題がある時は、職員会議で全職員で検討し、ケアプランの周知を図っている。	居室担当制をとっている。24時間シートを活用してモニタリングの充実を図りながら、家族の意向や支援経過のまとめを参考に担当と主任(ケアマネ)が作成した原案を職員会議で検討している。状態の変化に対応し随時見直しをしている。体力維持や日常の生活の充実を願う家族の意向を汲み、夫々散歩や手仕事(刺し子)が組み入れられている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日常生活記録「排便状態・気分行動・メモ生活・受診・水分量」を記録して職員間で情報の共有をケアに活かせるようにしている。ケア記録を確認しながら、状態の変化がある場合は、ケアプランの見直しをしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	施設内にある各事業所の特性を活かした支援を行うため、様々なニーズに対して廊下で繋がっている病院や地域包括支援センター・健康福祉課と連携を図っている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	各種ボランティア団体の受け入れや地元部落の方・消防署の協力による総合防災訓練、区内の小学校の里孫との交流等を継続して地域との繋がりを大事にしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人・家族の希望に沿って支援している。廊下で繋がっている、まごころ病院「内科・外科・整形外科・歯科」へ受診されたり、長年のかかりつけ医で診てもらうため、家族対応で精神科、眼科に受診されている方もいる。	全員が隣接の病院をかかりつけ医としている。夜間診療体制もあり受診は家族対応で医療情報は職員も共有している。精神科、眼科の診療も従来のかかりつけ医に原則家族同行だが、職員が同行することもある。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師が配置されており、介護職と看護職が連携を密に行い、異常の早期発見・速やかな対応ができるようにしている。隣接の病院の医師・看護師と連携を図っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院した場合、職員が頻繁に面会に行って状態の把握に努めている。また、家族と主治医と話し合う機会を設けて、回復状況や早期退院に向けて意見交換等を行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合における対応の指針について、家族に説明し同意を得ている。本人や家族の意向を尊重した看取りケアを実施しており、安らかに最期を迎えるように、医療機関との連携を強化して対応している。また、定期的に急変時のロールプレイを行っている。	入居時に重度化対応の説明をしており全員が同意書に署名している。重度化に対応するための指針、マニュアルも作成するなど、隣接病院医師の協力もあり「看取り」体制は整っている。現在対象者はいないが、急変時に備え「指針」も確認しながら職員研修を重ねている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	年1回、全職員対象にAED研修を実施している。また、必要に応じて誤嚥時の対応、緊急時の対応や吸引器の取り扱い、行方不明の緊急事態マニュアル等についてロールプレイを定期的に取り組んでいる。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	夜間想定避難訓練は、7月6日に実施しました。役割分担では、地元部落の応援を頂き避難誘導の協力と徘徊利用者の見守りを協力して頂く。	法人と地域は災害協定を結んでいる。ハザードマップ危険エリア対象外であるが、あらゆる災害を想定し訓練を行っている。7月に併設事業所合同で家族・地域住民30名の協力を得て総合防災訓練を実施した。ホーム単独での避難訓練も実施したいとしている。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	「職員禁句集」を月1回、全職員が読んでチェック表に印鑑を押すようにしている。また、スピーチロックの勉強会を実施し、認知症があっても自分らしく生活できるような接し方を工夫している。	プライドを傷つけない言葉がけに留意している。職員禁句集を再読、再確認しながらケアに臨んでいる。入浴・排泄・食事支援では羞恥心に配慮し、周囲に気配りした対応をしている。入浴時は同性介助を優先している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	趣味活動(畑作業、塗り絵、パズル、カルタ、雑巾縫い、散歩等)は、利用者が自由に選んで行っている。自分で出来る範囲で身の周りの掃除や洗濯物たたみ等を声がけしながら促している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	日常生活において決まった生活パターンではなく、その人らしさを大事にしている。落ち着きがない利用者には、本人の気持ちを尊重し、関わっている。野菜切りや盛り付け等、本人の意向を確認しながら勧めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	物忘れがあっても自分で出来ることはやって頂くように(ボタンかけ・衣類の着脱等)声かけや見守りをして促している。また、誕生会では化粧をして気分転換を図るように工夫している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	調理する際、職員と談話しながら、テーブル拭きやお茶のパック詰め、食器洗い、盛り付けや野菜を切るなど出来る限り利用者と一緒に行うようにしている。	利用者は「あんこ」が大好物、おはぎ・お汁粉・どら焼きは登場機会が多い。献立は、職員が冷蔵庫内の食材や自家菜園野菜を見ながら利用者の希望も入れ、一諸に調理している。3日毎に利用者同行で買出ししている。食事の雰囲気等の変化は、食欲増進にも繋がっている。定期的に栄養士の指導を受けている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量・水分量は毎食時チェックして記録している。水分摂取がしっかり出来るようにお茶を残す利用者には代替として、ポカリや牛乳を提供している。また、週に一回、栄養士に検食簿を提出し、助言をいただいている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアと就寝前の義歯洗浄・消毒の支援をして清潔保持に努めている。また、食事前の嚥下体操を実施し誤嚥防止に努めている。歯みがき指導や治療については、家族対応で歯科受診している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	利用者個々の排泄パターンの把握に努め、定期的にトイレ誘導をしている。直ぐにチェック出来るように排泄チェック表に記録し排便状態の観察をしている。	排泄チェック表を参考に、しぐさや表情に気配りしトイレ誘導で日中は全員がトイレで排泄できるように支援している。2名は自立、他はリハビリパンツやパットを併用している。オリゴ糖やスポーツドリンクを併用し排泄がスムーズに出来るように支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日、ヤクルトやヨーグルトを提供している。便秘予防ができるように水分補給を促している。食事を作る際は青菜を使って彩りや栄養のバランスを考えている。朝食後に散歩をし身体を動かすようにしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴は、予定通り実施している。熱がある時は、清拭をして身体の清潔保持に努めている。また、歩行が出来ない利用者には電動リフトを使用して、安全・安心に入浴ができるように努めている。	浴槽は個浴で、入浴は午後の時間帯に週2回の頻度としている。浴槽に出入り困難な利用者用に電動リフトを設置している。話が弾む利用者や楽しそうに歌を唄っている方もいる。入浴を好まない方には「お孫さんに頼まれました」と勧めている。体調に応じシャワー浴を組み合わせながら支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	夜間、安眠できるように、利用者の生活パターンを把握して、中庭や公園等へ散歩を促すなど、両足に浮腫みがある方には、足を挙上して休息できるように支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	一人ひとりの薬の内容が把握出来るように個別の薬情報綴又は薬手帳で確認している。薬は個別包にして、氏名を印字し服薬時は職員複数で確認し合い服薬している。誤薬がないようにマニュアル通り実施している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	生活歴等から得意な仕事や趣味を把握して、役割として、テーブル拭きや洗濯物たたみ等を利用者の状態に合わせて協力して頂き、感謝の気持ちを伝えることで、いきいき生活できるように支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	花の苗購入、地元の小学校の運動会、夢の湯温泉小旅行、オープンガーデン見学など、利用者の意向を確認しながら外出している。また、三日に一回、食材購入をするため、スーパーや産直等へ出かけている。	普段は中庭で外気浴・日光浴で気分転換をし、天気の良い日は施設の周辺や隣接公園に出かけ散歩を楽しんでいる。3日に一度の食材買い出し、花壇やプランターの花の苗を買いに産直やスーパーに職員とともに出かける方もいる。時々ドライブであやめや桜を見に出かけている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	施設内の自動販売機や喫茶はあるが、お金を所持し購入したい希望者はいない。利用者又は家族より要望があって所持金管理に不安がある場合は、「預かり金管理」をして、日用雑費の購入など対応することもある。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人から電話連絡したいと訴えがある時は、随時、家族と通話出来るように支援している。また、家族から電話があった時は本人の気持ちを伝えて話を聞いてもらうように支援している。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	玄関には、プランターに花やミニトマト等を植えたり、ソファを設置する時は歩行が出来ない利用者も他利用者と触れ合える空間作りを工夫している。まは、食堂に長椅子を設置し、気軽に話しやすい居心地良い雰囲気作りをしている。	照明に気配りした掃除の行き届いた廊下の所々には、ソファが置かれお休み処や談話コーナーに利用されている。小上がりの畳の間は冬場は堀こたつが用意される。調理場を囲むように置かれたテーブルや長椅子で利用者は職員に見守られながら思い思いに寛いでいる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	談話コーナーにロールカーテンを設置して、面接の時等に気軽に過ごせるように気配りしている。また、座敷で洗濯物を畳んだり、利用者同士で談話する空間として活用されている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自宅から家具やテレビなど馴染みの物を居室に置いて、自宅と同じ家具の配置や雰囲気作りを家族に聞きながら取り組んでいる。	居室はベッドとエアコンが備えられている。各々にタンスや衣装ケース、椅子が使い勝手よく配置され、壁面には誕生会での孫・ひ孫との家族写真や色紙、利用者の作品も飾られている。利用者と共に清掃している居室は整理整頓が行き届き、担当職員の顔写真が居室入口に飾られ来訪家族にも喜ばれている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	施設内は、バリアフリー・オール電化を使用している。毎月、危険個所のチェックをして、リスク予防に向けて取り組んでる。		